

「ない」と「あった！」

今日は八月十二日。ちょうど孫の透の満二歳の誕生日に当る。近所に住む長男の第一子であるが、私にとっては男の孫の第一号でもある。同じ孫である、男・女によって愛情の差等があるわけではないが、内孫としては最初の子であったことと、近くに住む関係から、その生長過程には、おのずから目をとめる機会が多くなった。

わが子が生まれ育つ頃は、私はまだ若く、家庭をよそにがむしゃらに生きるといった状態だったので、子どもの生長を落ち付いて見守る時もないままに、かれらはおのがじしの性さがにしたがって成人したといつてよい。職掌柄もつとも深い関心が寄せられてよさそうな言語の習得状況についても、持続的に記録をとることはもとより、観察をする暇もないままに過ぎたように思う。それは性来の無精にもよるであろうが、今省みて、別に後悔めいた感懐がうかぶというのでもない。ひょっとすると、父親としての責任感のようなものを、人並みに心のどこかに藏しまい持っており、それに半無意識的によりかかっていたからかも知れない、と思ってみたりする。しかしその辺に

なると、自己診断も怪しいものとなる。

ともあれ、孫の場合はちがう。とくに近くにゐる孫、具体的には透の場合は、祖父としてのこちらの心境にもよるであろうが、それにまた、わが子の場合とちがひ少し距離をおいて観察しろるということにもよるであろうが、言語の習得状況についても、比較的深い関心を寄せる余裕を持つようになった。

満一歳の誕生日を過ぎた頃から、擬音語があらわれはじめた。五右衛門風呂の焚口で勢よく燃える火は「ポーポー、ポーポー」、その風呂の蛇口から注ぎ入れられる水は「ジャージャー、ジャージャー」である。その頃まだ近くの国鉄支線を走っていた蒸気機関車は「シューシュータッタ」であった。そのうちに、一歳半になった頃かと思うが、「ない」という歴とした言葉を口にするようになった。もとより完全な発音ではなく、おとなの耳には「にゃー」という風に聞き取れる言葉である。

牛乳の配達は早朝であるから、かれはまだ目をさましていないが、夕方配られるヨーグルトの方は、みずから配達箱にそれを取りにゆく慣わしが、いつのまにかついていた。まだ配達されていないと、いかにも失望したように、「にゃー」という。いつもの所にそれを見つけた時は、「あった!」のつもりだろうが、「たっ!」としか聴き取れない、従って「あった!」よりもさらに力のこもった言い方で、勝者の誇りのようなものを満面にうかべて報告する。今取り出した二個

のピンを両手に持ったまま、もう一度引き返し、箱をのぞき込んで、「にゃー」という。その語調と表情は、はじめから箱が空であった時と変らない。

書斎で机についていると、廊下をトン・トンと小走りする音が近づいて、ドアをあけて私の姿を見つけると、「たっ！」を連発して喜ぶ。調べ物などするため、隅の方に移動して、入口から姿が見えない時は、「にゃー」という、期待はずれの感情をこめた声が入ってくる。急に姿を現わすと、「たっ！たっ！」と喋って喜ぶ。

「にゃー」と「たっ！」では、前者が後者より習得の時期が早かったと、その母親はいう。私の聞いたのも「にゃー」の方が先であった。しかし「たっ！」を習いおぼえてからは、「にゃー」とともに、実に正確に使い分けていった。絶対に紛れようがないほど、語調と表情と体様に明白な対照が見られた。この二つの言葉は、分水嶺で水源が左右に分れるように、孫の心の深奥の所でずではっきり分れているに相違ない。

この二つの関連語を、私は単純に聞き流すことができなくなってきた。「にゃー」にしても、「たっ！」にしても、これらの幼児語は、明らかに「存在」の有無を表わすものである。この世に生を得て、最初に習得した言葉が「ない」の意味の「にゃー」であったこと、不完全ながら、「無」の認識が「有」の認識に先行することは、私を畏怖させるに足るものがある。いや「不完全ながら」とはおとなの思い上がりかも知れない。おとなより正確に、この一歳半の幼児は、対

「ない」と「あった！」

象をとらえているかも知れない。全身・全霊をもって認識しえた者の語調・表情・体様がそのことを語っている。日本語の「しる」の機能が完全に発揮された姿を、そこに見ることができように思ら。

この幼児が、いつの日か、世界の「虚無」に気づき、その深淵を超えるために、徒勞の多い思考を繰り返すようになるのであろうか。いや、その過程こそ、人生そのものなのかも知れない。

(四六・一〇)